

第30回

北日本図書館 大会から

— 報告 —



●図書館コーナー●

第三十回北日本図書館大会は、福島県の主催のもとに五月二十四・五の両日開かれた。(ちなみに第一回大会は、昭和二十五年七月一日、飯坂町で開催された。三十年前のことである)。参加者は約三百名。(県外百名、県内二百名)図書館関係者の図書館活動に対するみなみならぬ意欲がうかがわれた。

開会式において図書館事業に対する

功労者として、菅野熙山崎義平、向井勝典(北海道)、小野孝美(盛岡)、庄司ヒサヨ(仙台)の五氏が表彰された。

特に菅野氏は、私設文庫に司書二名を雇い、移動図書館車まで購入して読書普及に努め、北海道枝幸町立図書館設立に当たつて、これらをそつくり寄付

されたことは特筆されるべきものである。

また永年勤続者として五名のかたが、三十年以上勤務、今なお専門職として着実に仕事をされていることは、若い図書館員の歩むべき道を範示してくれているものといえる。

大会はテーマを「住民が期待する図書館奉仕」として、講演、事例発表、分科会の形をとつたが、事例発表には各館それぞれくふうをこらした運営内容が発表され、参加者が熱心にメモをとる姿が見られた。

日野市企画財政部長前川恒雄氏(前日野市立図書館長、新しい日本の図書館の先覚者)の講演「行財政の立場から図書館発展の方策を探る」は、まず

欧米と日本の図書館の相違は、欧米は自治体ごと図書館を複数もつていて、図書も新鮮でたくさんとりそろえ、市民の中に完全にとけ込んでいる。そして図書館委員が独立して、独自に図書税を徴収でき、国の補助に頼らないで運営できるということである。

日野市立図書館を経営するに当たつていくつかのことを実施したが、もつとも大きなことは、市民のもつている本をもち寄って、みんなで使うことから始めた。すなわち自分たちの図書館なら、自分たちで金を出すという欧米の姿から始めた。図書館の発展は市長並びに図書館員が図書館をどのように認識しているかによつて影響される。

とも大きくことは、市民のもつている本をもち寄つて、みんなで使うことから始めた。すなわち自分たちの図書館なら、自分たちで金を出すという欧米

のともいえない。それは地上の道のよななものである。もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道となるものだ。」という言葉を引用して図書館に対する愛情、市民に対する責任、そしてさまざまなものに耐える勇気をもつて図書館経営に当たるべきだと講演し、参加者に多大の感銘と勇気を与えた。

事例発表は図書館例が二つ、公民館から二つ、子供の読書から二つ行われた。多賀城市立図書館は、開館に当たつて迷わず日野方式を採用して活発に活動していることが注目された。郡山市図書館は新館建築の構想に当たつて、住民との対話を重ね、図書館員の衆集を集めて構想をねり、市民の要望をじゅうぶんに採用して基本構想をかためた。また岩手県胆沢町では、公民館図書室の運営について、位置、スペース、インテリア、新刊購入、職員の専門化等、小さいなりに創意くふうが見られ、本県の公民館関係者には参考となるものが多かつた。子供の読書については、このくらいの長期的展望に立ち、さらにはサービスポイントの重点化を図るべきである。

二十一パーセントの利用があれば可とすべきである。館長は高い識見と実行の勇気をもつて、理想実現のために低い次元のものからやらなければならぬ。図書館発展の方策は、あるようないものだ。魯迅の「希望とはもともとあるものともいえぬし、ないも

のともいえない。それは地上の道のよなものである。もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道となるものだ。」という言葉を引用して図書館に対する愛情、市民に対する責任、そしてさまざまなものに耐える勇気をもつて図書館経営に当たるべきだと講演し、参加者に多大の感銘と勇気を与えた。